

桜島の火山活動解説資料（令和3年4月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

南岳山頂火口では、噴火活動が続いています。弾道を描いて飛散する大きな噴石は最大で4合目（南岳山頂火口より1,300mから1,700m）まで達しました。また、噴煙は最高で火口縁上3,000mまで上がりました。

25日01時09分に発生した爆発において、火砕流が南岳山頂火口から南西側へ約1.8km流下したと判断し、02時40分に火口周辺警報を切り替え、警戒範囲を居住地域近くまで拡大しました。その後、火砕流と判断した現象は噴煙の一部が流下したものであると判明したことから、15時30分に火口周辺警報を切り替え、警戒範囲を南岳山頂火口及び昭和火口から概ね2kmの範囲へ縮小しました。

広域のGNSS連続観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部で長期にわたり供給されたマグマが蓄積した状態が継続しており、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態が続いていることから、南岳山頂火口を中心に、噴火活動が継続すると考えられます。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るため注意してください。爆発に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意してください。なお、今後の降灰状況次第では、降雨時に土石流が発生する可能性がありますので留意してください。

○ 活動概況

・ 噴煙など表面現象の状況（図1～4、図6、図8-①②）

南岳山頂火口では、噴火が42回（3月：31回）発生し、このうち爆発は34回（3月：14回）で、いずれも前月と比べて増加しました。弾道を描いて飛散する大きな噴石が最大で4合目（南岳山頂火口から1,300mから1,700m）まで達しました。また、5日06時41分に発生した爆発では、噴煙が火口縁上3,000mまで上がりました。

25日01時09分に発生した爆発では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が5合目（南岳山頂火口より1,000mから1,300m）まで飛散し、やや多量の噴煙が火口縁上2,300mまで上がり、南西に流れました。

この噴火に関して、当初、同火口から火砕流が南西側へ約1.8km流下したと判断しましたが、同日（25日）、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測で火砕流の痕跡に相当する高温部はなく、樹木がなぎ倒される等の状況は認められませんでした。また、監視カメラの画像を精査した結果、噴煙の流下速度も桜島で観測される火砕流と比べ

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ

（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（令和3年5月分）は令和3年6月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

（<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>）

この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局大隅河川国道事務所、京都大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び鹿児島県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『基盤地図情報』を使用しています。

て遅いものでした。

このため、火砕流と判断していた現象は、風下に流された噴煙の一部と考えられます。

また、同火口では、夜間に高感度の監視カメラで火映を観測しました。

昭和火口では噴火は観測されていません。

・地震や微動の発生状況（図5、図8-⑤～⑦）

火山性地震の月回数は148回で、前月（3月：195回）と比べて減少しました。震源が求まった火山性地震はありませんでした。火山性微動の継続時間は月合計70時間48分で、前月（3月：63時間18分）と同程度でした。

・火山ガスの状況（図8-④）

期間内に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり1,800～2,400トンと概ね多い状態でした（3月：1,800～2,900トン）。火山ガス（二酸化硫黄）の1日あたりの放出量は、2020年8月以降増加傾向がみられ、9月下旬以降は概ね多い状態となっています。

・地殻変動の状況（図9～11）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、今期間は特段の変化は認められませんでした。

GNSS連続観測では、桜島島内の基線で2019年9月頃から山体の隆起・膨張に伴うと考えられるわずかな伸びが認められていましたが、2020年4月頃から停滞しています。一方、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部の膨張を示す一部の基線では、2019年9月以降伸びが認められます。始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部では、長期にわたり供給されたマグマが蓄積した状態と考えられます。

・降灰の状況（図7、図8-③）

鹿児島地方気象台（東郡元）では、月合計42g/m²（降灰日数：22日）¹⁾の降灰を観測しました。

鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した桜島の火山灰の2021年3月の総噴出量は、約11万トン（2021年2月：約9万トン）でした。

1) 鹿児島地方気象台（東郡元：南岳の西南西約11km）における前日09時～当日09時に降った1m²あたりの降灰量です。



図 1-1 桜島 4月5日06時41分の南岳山頂火口の爆発の状況（中央港新町監視カメラ）
噴火に伴う噴煙が火口縁上3,000mまで上がりました（黒矢印）。



図 1-2 桜島 4月28日20時44分の南岳山頂火口の爆発の状況
（海潟監視カメラ（大隅河川国道事務所設置））

弾道を描いて飛散する大きな噴石が最大で4合目（南岳山頂火口から1,300mから1,700m）まで達しました（赤矢印）。



図2 桜島 4月25日01時09分の南岳山頂火口の爆発の状況
 （左図：中央港新町監視カメラ、右図：海潟監視カメラ（大隅河川国道事務所設置））

やや多量の噴煙が火口縁上2,300mまで上がり南西に流れました。当初、同火口から火砕流が南西側へ約1.8km流下（左図、黄破線内）したと判断しましたが、同日（25日）に実施した現地調査の結果（図3及び図4）、赤外熱映像装置による観測で火砕流の痕跡に相当する高温部はなく、樹木がなぎ倒される等の状況は認められませんでした。また、監視カメラの画像を精査した結果、噴煙の流下速度も桜島で観測される火砕流と比べて遅いものでした。

このため、火砕流と判断していた現象は、風下に流された噴煙の一部と考えられます。

また、弾道を描いて飛散する大きな噴石が5合目（南岳山頂火口より1,000mから1,300m）まで飛散しました（右図、赤円内）。

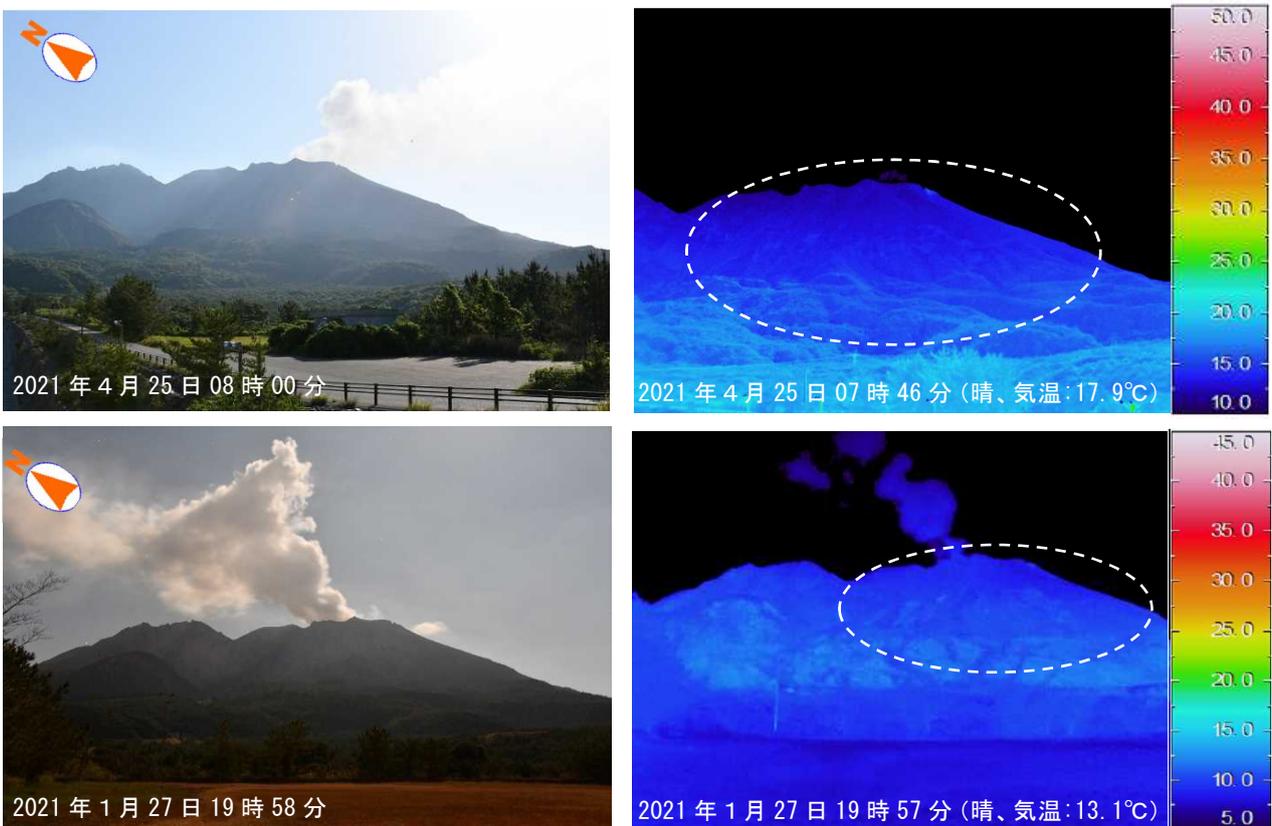


図3-1 桜島 南岳の可視及び地表面温度の状況（桜島の南西側（野尻町）から観測）

25日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測で火砕流の痕跡に相当する高温部はなく（右図白破線内）、樹木がなぎ倒される等の状況は認められませんでした。

※比較のため、桜島の南西側（野尻町）で2021年1月27日に観測した南岳の可視及び地表面温度の状況を下段に示しています。

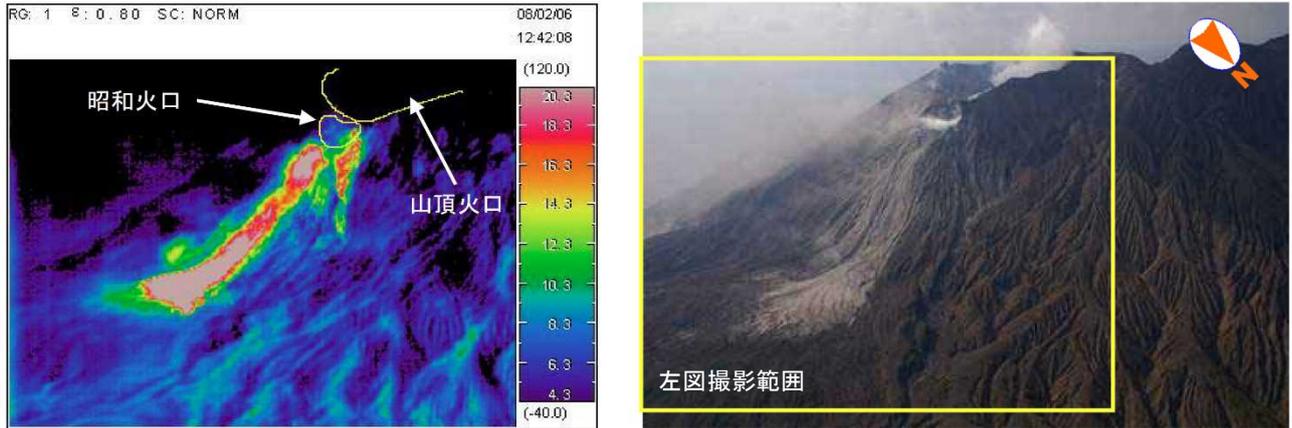


図 3-2 桜島 火砕流の流下痕の例（2008年2月6日、昭和火口の火砕流）

桜島で噴火に伴い火砕流が発生した直後には、その痕跡として左図のように温度の高い領域が観測されます。



図 4 桜島 図 3 の観測位置及び撮影方向

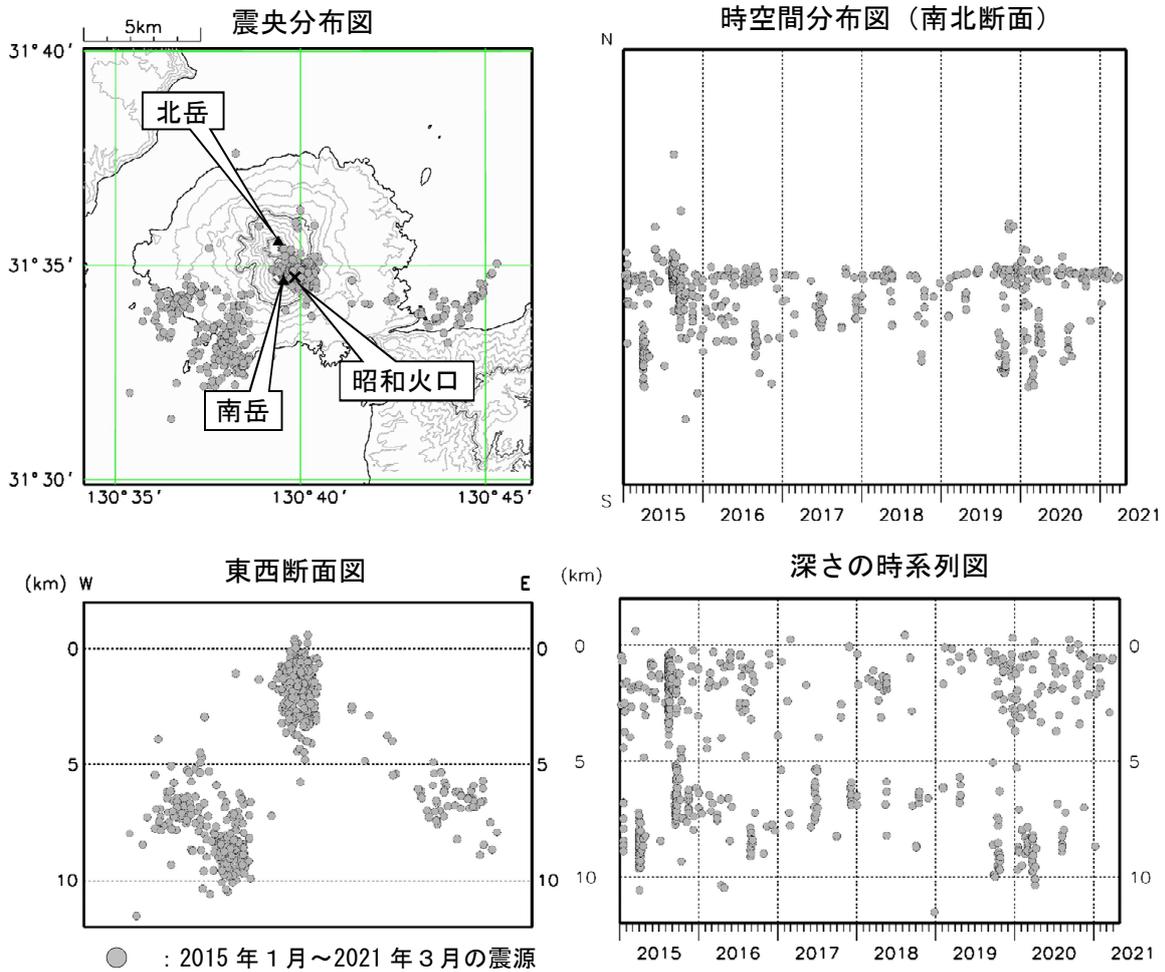


図5 桜島 震源分布図（2015年1月～2021年4月）

< 4月の状況 >

震源が求まった火山性地震はありませんでした。

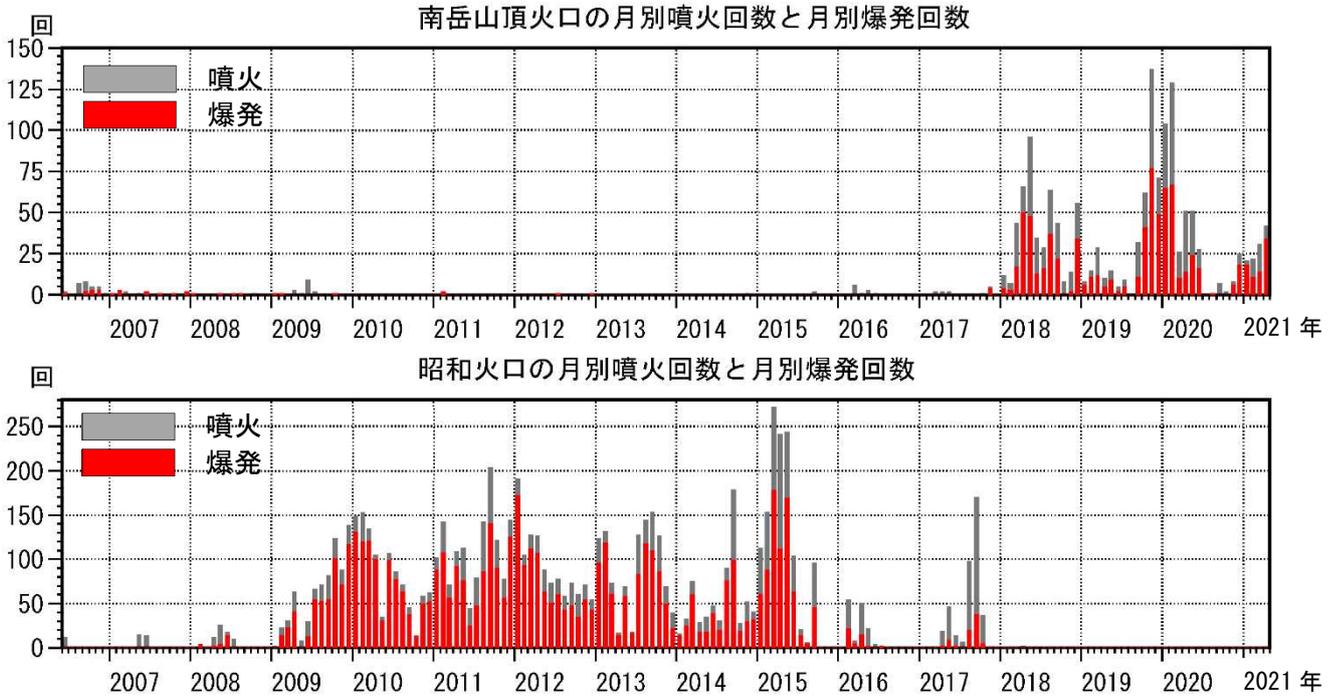


図6 桜島 南岳山頂火口（上図）と昭和火口（下図）の月別噴火回数と月別爆発回数
（2006年6月～2021年4月）

<4月の状況>

- ・南岳山頂火口では、噴火が42回（3月：31回）発生し、このうち爆発は34回（3月：14回）で、いずれも前月と比べて増加しました。
- ・昭和火口では、噴火は観測されていません（3月：なし）。

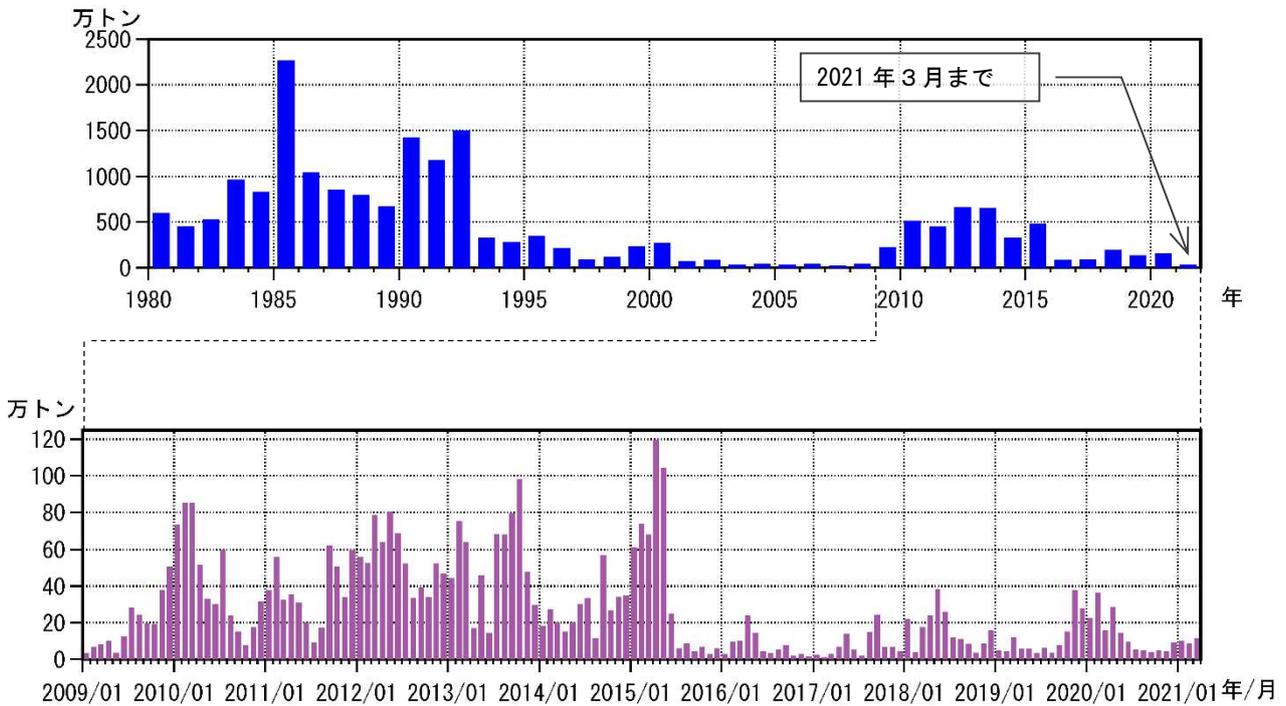


図7 桜島 鹿児島県が実施している降灰の観測データから推定した火山灰の総噴出量
（上段：1980年1月～2021年3月の年別値、下段：2009年1月～2021年3月の月別値）

2021年3月の総噴出量は、約11万トン（2月：約9万トン）でした。

※鹿児島県の降灰観測データをもとに鹿児島地方気象台で解析して作成しました。
※降灰の観測データには、風により巻き上げられた火山灰が含まれている可能性があります。

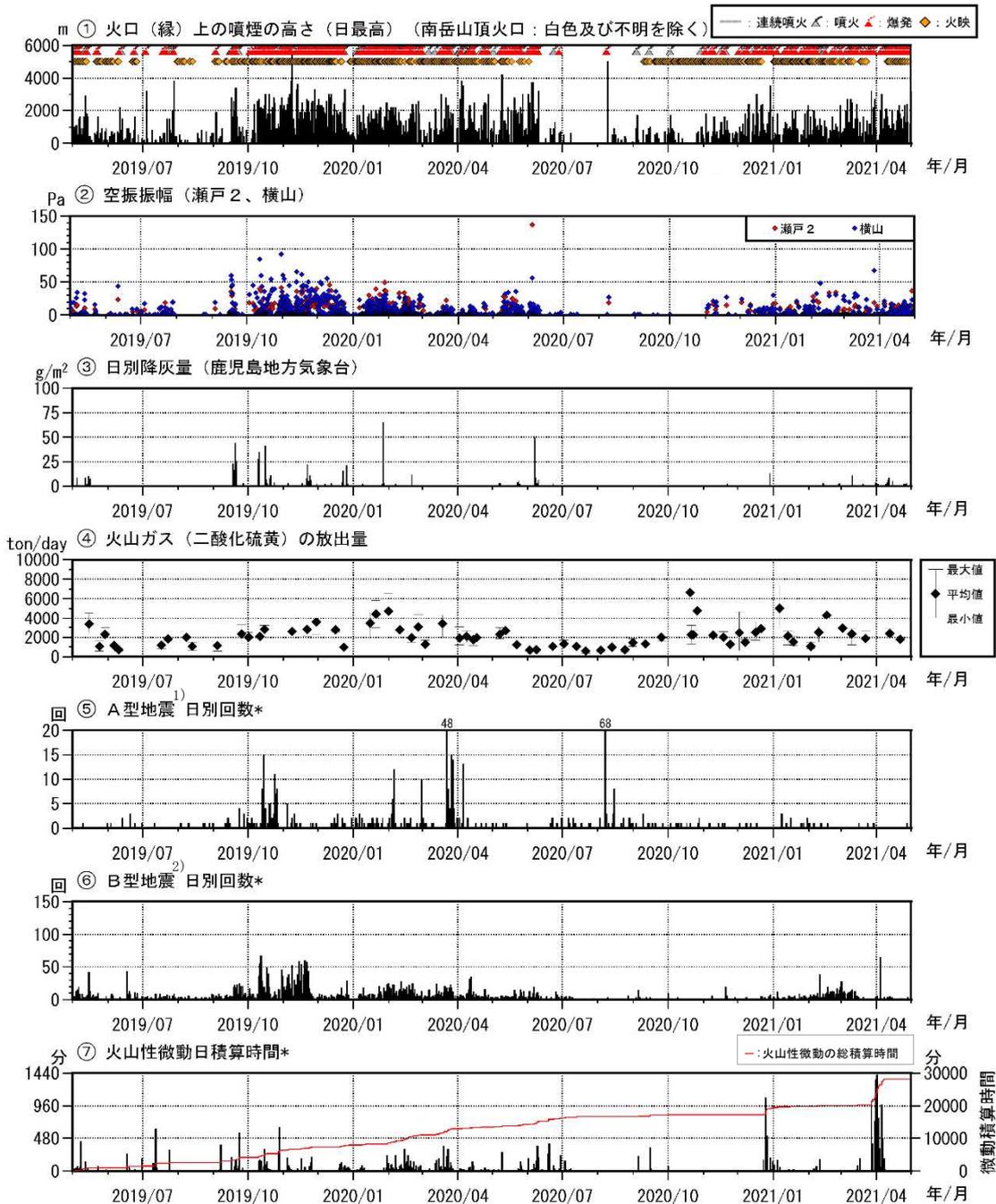


図8 桜島 最近2年間の活動経過図（2019年5月～2021年4月）

< 4月の状況 >

- ・南岳山頂火口では、噴火が42回発生し、このうち爆発は34回でした。噴煙は最高で火口縁上3,000mまで上がりました。また、同火口では、夜間に火映を観測しました。
- ・鹿児島地方気象台（東郡元）では、月合計42g/m²（降灰日数：22日）の降灰を観測しました。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり1,800～2,400トンと概ね多い状態でした（3月：1,800～2,900トン）。
- ・火山性地震の月回数は148回で、前月（3月：195回）と比べて減少しました。
- ・火山性微動の継続時間は月合計70時間48分で、前月（3月：63時間18分）と同程度でした。

*「あみだ川及び横山観測点」で計数（計数基準 あみだ川：水平動2.5μm/s以上 横山：水平動1.0μm/s以上）

- 1) 火山性地震のうち、A型地震はP波やS波の相が明瞭で比較的周期の短い地震で、一般的に起こる地震と同様、応力集中による地殻の破壊によって発生していると考えられますが、火山活動に直接関係する発生原因として、マグマの貫入に伴う火道周辺の岩石破壊などの例があります。
- 2) 火山性地震のうち、B型地震は相が不明瞭で、比較的周期が長い地震で、火道内のガスの移動やマグマの発泡などにより発生すると考えられています。

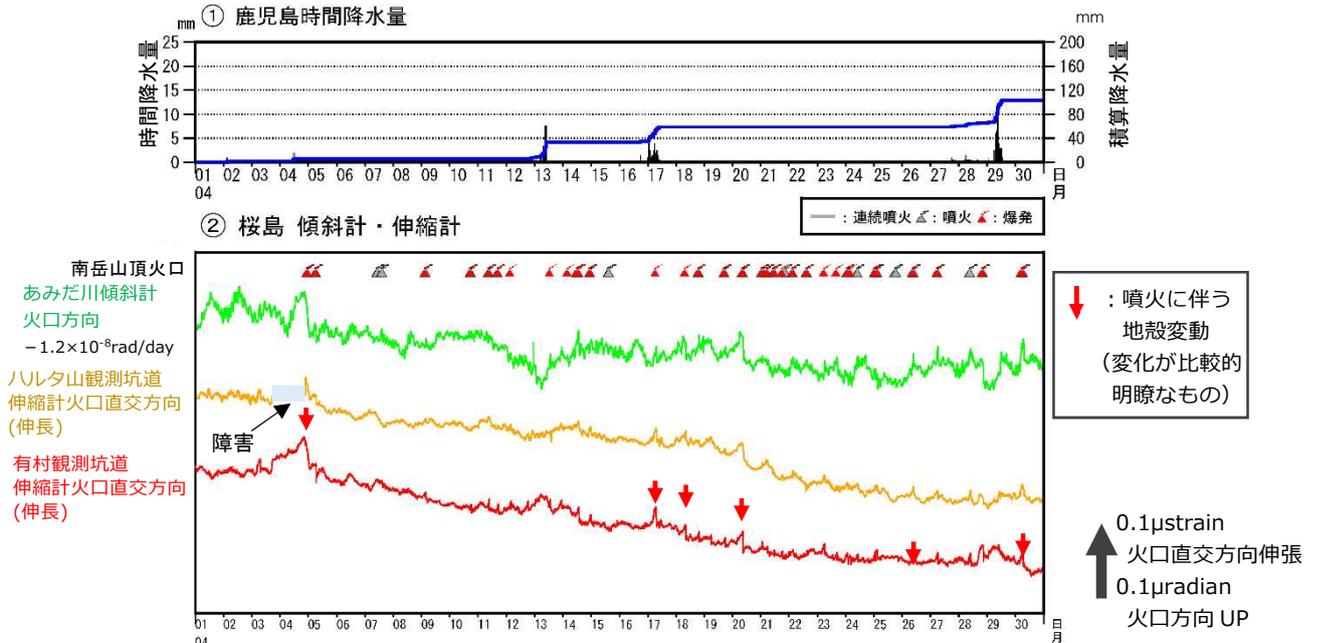


図9 桜島 傾斜計及び伸縮計による地殻変動の状況（2021年4月）

桜島島内の傾斜計及び伸縮計では、一部の噴火に伴い、噴火前のわずかな山体の隆起・膨張、噴火後のわずかな沈降・収縮が観測されました。

※あみだ川傾斜計火口方向の傾斜変動には、 -1.2×10^{-8} rad/dayのトレンドの補正を行っています。
 ※図の作成には、大隅河川国道事務所の有村観測坑道及び京都大学のハルタ山観測坑道の観測データを使用しています。

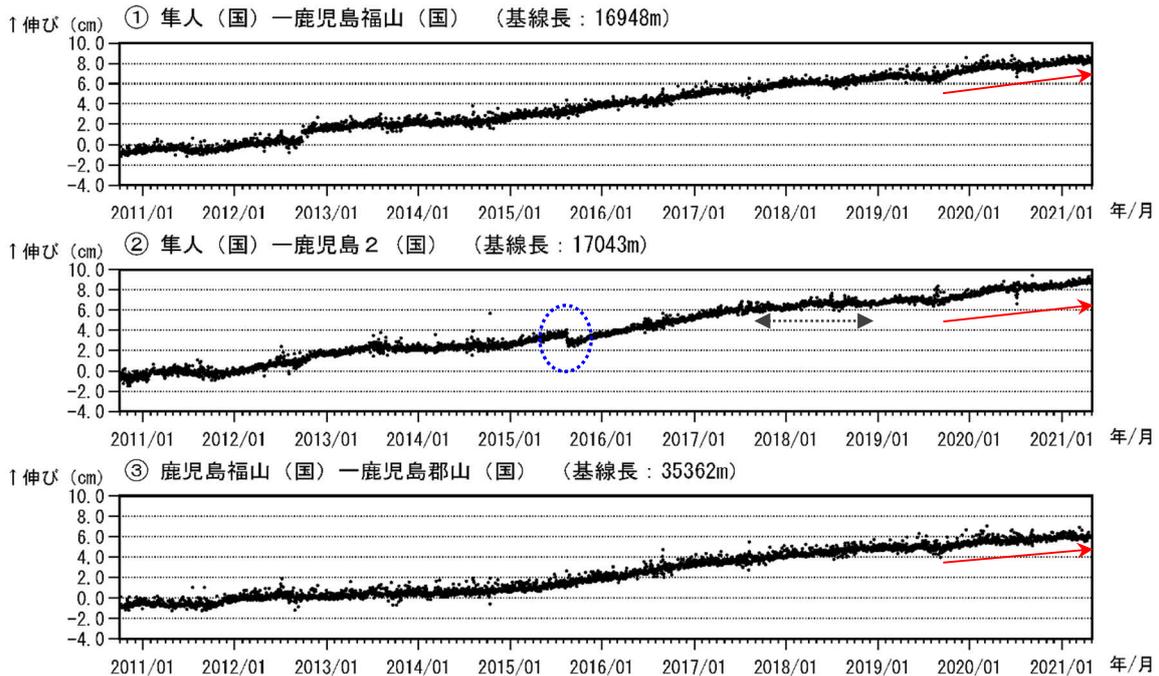


図10-1 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月～2021年4月）

始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部の膨張を示す一部の基線では、2019年9月以降伸びが認められます（赤矢印）。始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部では、長期にわたり供給されたマグマが蓄積した状態と考えられます。

これらの基線は図11の①～③に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2012年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

基線①～③については、国土地理院の解析結果（F3解及びR3解）を使用しました。

基線②は霧島山の深い場所での膨張によるとみられる変動の影響を受けている可能性があります（黒破線矢印期間内）。

青色の破線内は2015年8月の急激な山体膨張による変動です。

（国）：国土地理院

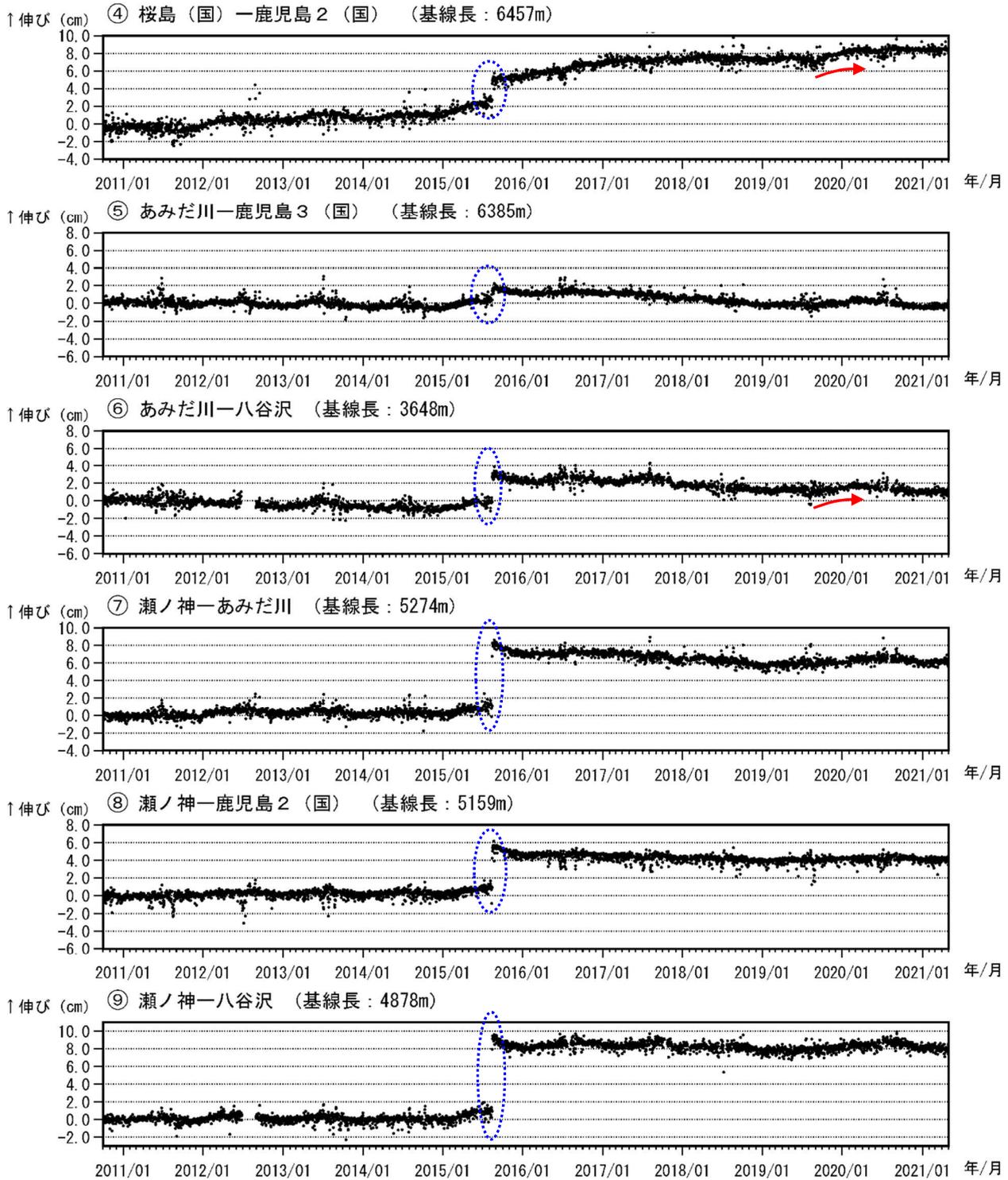


図 10-2 桜島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010 年 10 月～2021 年 4 月）

桜島島内の基線において、2019 年 9 月頃から山体の隆起・膨張に伴うと考えられるわずかな伸びが認められていましたが（赤矢印）、2020 年 4 月頃から停滞しています。

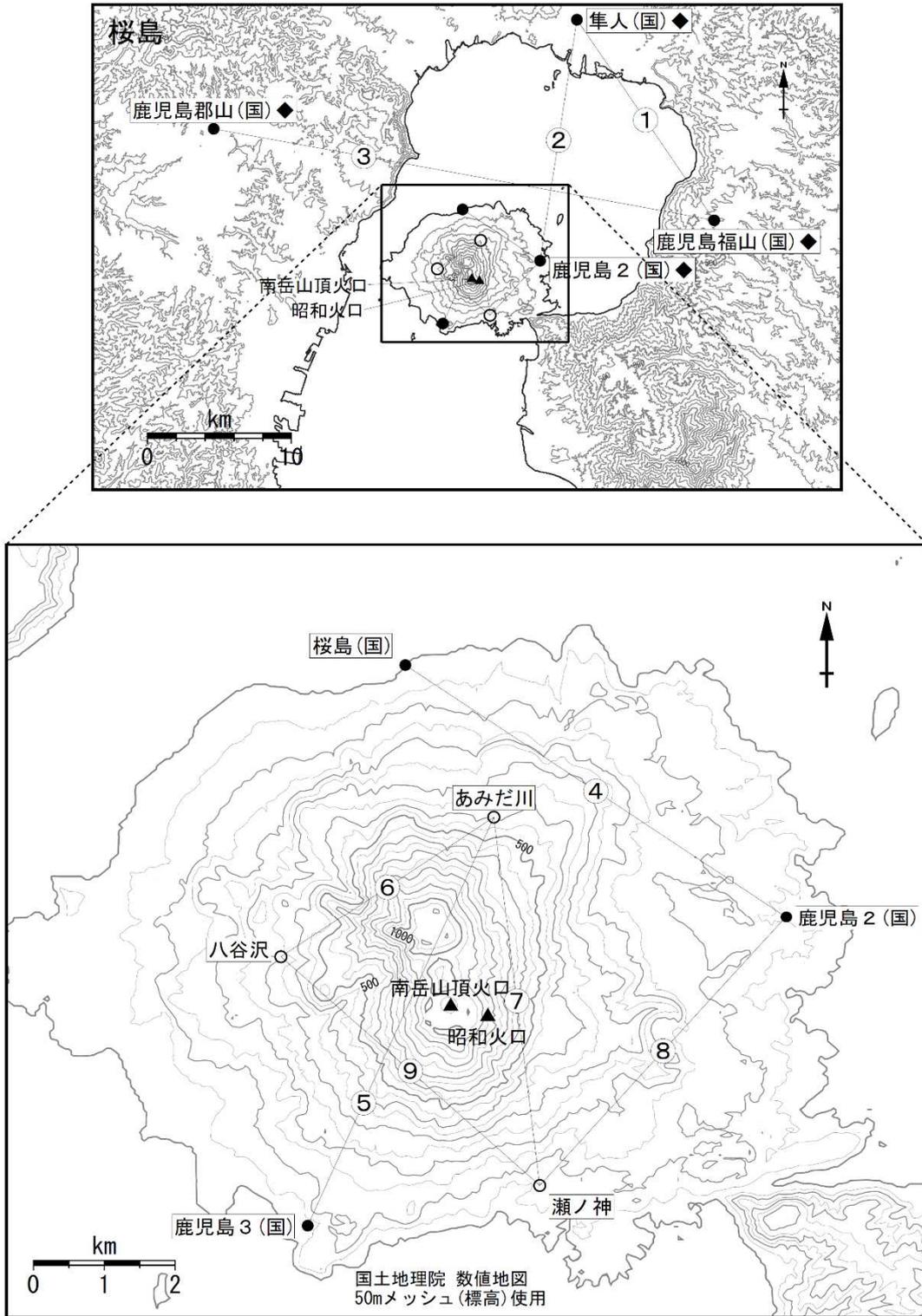
これらの基線は図 11 の④～⑨に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2012 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

青色の破線内は 2015 年 8 月の急激な山体膨張による変動です。

(国)：国土地理院



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院

図 11 桜島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院

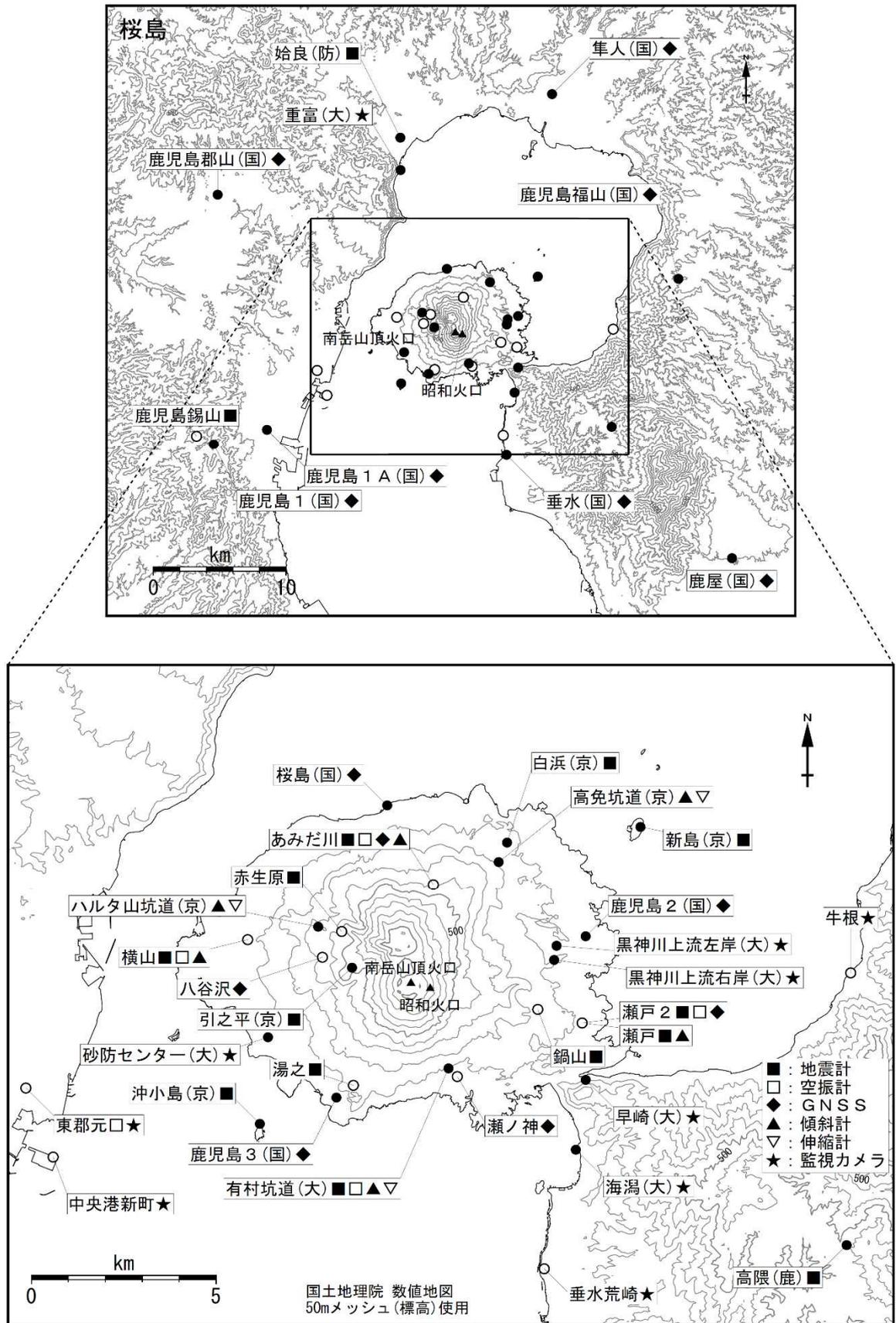


図 12 桜島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(大) : 大隅河川国道事務所、(京) : 京都大学
 (鹿) : 鹿児島大学、(防) : 防災科学技術研究所